

## ジャクソン・M・ギャロット牧師



1948（昭和23）年、福岡生まれ。父側の祖父は牧師、母側の祖父は神学校教授、両親は宣教師でした。

10歳の時、アフリカ伝道に尽力したリビングストン師の墓を訪ねた際「私も宣教師になる」と両親に言いました。

高1まで日本で過ごし、米国の大学では演劇と作詩を学びました。大学でカメラが上手で、記念アルバム等で活躍。大学で妻と会い、卒業の翌日結婚しました。現在、娘二人と孫三人がいます。

転機は父が亡くなった74（昭和49）年の夏。当時、佐世保にいて、県立大学で英語を教えていました。

長崎では、お盆に爆竹や鉦（かね）を鳴らしながら、精霊船を引き回す風習があります。家の外から聞こえるそれらの音に、強い虚しさを感じました。

「偽りの神しか知らないこの日本に、まことの生ける神の愛と永遠の命を伝えたい。」

それから米国テキサス州の神学校に入学し、78（昭和53）年の卒業後、日本に戻る前にバージニア州での教会を牧会しました。

長崎市内の大学から問い合わせがあったので、家具などを売って、教員ビサを申請するための書類を待ちました。なかなか来なかったのも、また大学に訊いたら、「別の人を雇いました」と答えられた。

落胆のあまり神に祈りました。「当時、私は献身以外に二つの夢を持っていました。一つは日本に戻ることに、もう一つはカメラで身を立てること。その二つを神の前に手放したとき、道が開かれました」。2カ月後、大村で英語講師の仕事が与えられました。

ある時、ギャロット師は主から一つの幻を与えられました。

クリスチャン大名の大村純忠が肥前藩主だった戦国時代、人口の実に8割がキリスト教徒でした。大村こそ、日本最大のリバイバル都市だったのです。

「大村を再び日本一のクリスチャン都市に」。それがギャロット師と、新生の里キリスト教会の揺るがぬビジョンです。